

平成 08 年 09 月号

陸上自衛隊第 14 普通科連隊長兼

金沢駐屯地司令 一等陸佐 錦戸泰三氏

アパグループ代表 元谷外志雄

一日のため、百年兵を養う

いざという時に国民の期待に応える、

そのための訓練こそが仕事

自衛隊に入って 34 年、

ずっと戦車とともに歩んで……

元谷 今日は、お忙しい中ありがとうございます。連隊長兼司令として金沢に赴任されたわけですが、これまでの勤務地としては前任地の北海道方面が長かったのですか？

錦戸 いいえ、僕は北海道はここに来る前の三年間だけです。一番長かったのは、富士地区でした。それに九州も長かったですね。

元谷 一貫して戦車畑だとお聞きしていますが……。

錦戸 ずっとです。十七歳で戦車に配属され、以来ずっと戦車畑です。そもそも、私は少年自衛官として十五歳で入隊していますから……。

元谷 それはすごいですね。これまでの連隊長で少年自衛官出身者は何人かいらっしゃるのですか？

錦戸 金沢の連隊長としては、私が初めてではないでしょうか。以前の連隊長はほとんど防大出身者ですし、それ以上前になると、陸軍士官学校の出身者でしょう。

元谷 そうですか、陸士か防大出身者がほとんどですか。

錦戸 出身がどうであれ、指揮官となった者は、それぞれの隊の特性と運用の仕方を覚えておかねばなりません。

元谷 日本の場合は海からと、空からの外敵の侵入がありますから、海から来る敵に対しては波打ち際でどう撃退するかということがあります。大国であれば引き込んで殲滅する戦略がありますが、犠牲が多いですね。日本は海岸線が長いので水際での防衛力が大事です。

錦戸 日本の海岸線は離島を含め 3 万 3 千 km もあるのですから……。

元谷 それを現在の十数万人の陸上自衛隊だけで守ることなど、到底できないと思います。その辺を陸海空の連携プレーでやらなければいけませんね。

錦戸 洋上で撃破又は撃退してしまえばいいのですが。それができれば、今度は陸上自衛隊が要らなくなってしまいます（笑）。

元谷 いやいや、やはりそれぞれ役割があります。

錦戸 やはりどうしても戦うとなったら波打ち際で防衛するのが一番良いと思います。

元谷 そうでしょうね。ですから針ねずみの理論ですが、ミサイルで敵艦を領海まで入れてしまわないようにする防衛体制をつくる、そういうことにウェイトをかけて予算配分されるべきだと思います。結局、少ない予算でいかに最大の効果を得るかという考え方が一番大事なのではないでしょうか……。

錦戸 その辺はやはり中央の考え方です。陸海空のシェアの話もあるし、陸上などでもどこかの戦力へ一番予算をもって行くべきか、トータルの考えるのです。

**国際情勢の変化とともに、
自衛隊もまた時代を呼吸している**

元谷 一昨年でしたか、村山さんが総理になられたときに、国会で当時の社会党が自衛隊合

憲発言をしました。ある意味では、それによってようやく国民の認知を受けられたわけで、長年の自衛隊の努力が認められたという感がありますね。

錦戸 社会党の村山さんが正式に認めたことによって、本当に共産党など一部を除いて、あとはもう大半に認められるという……。

元谷 そういう大きな流れを受けて、この際私は、自衛隊用語なども一般にわかりやすいように変えられたら良い時期にきているのではないかと思うのですが……。

例えば「戦車」ですが、昔は「特車」と言っていたんですよね。これと同じように、階級の呼び方なども「一佐」「二佐」ではなくて、一般人としての我々にも分かりやすい用語にすべきだと思います。

錦戸 そうですね、戦車については、今では戦車になりましたが、砲兵に関しては今でも「特科」と言っていますので、徐々にわかりやすく親しみやすいものに変えていく必要がありますよね（笑）。

元谷 それと少し私の考えを言わせてもらいますと、ソ連がロシアに変わっても自衛隊の配置が未だに北方重視のままですが、いわゆるシフトを九州方面に目くばりをした布陣に変換していく方が良いと思うのですが。もちろんやられておられるのですが、国際情勢の激変に自衛隊が即応しているかと考えると、どうかという気がします。

錦戸 そうですね。去年の秋に防衛計画の大綱も新しく変わって、それを受けて具体的な政策が進められ、今度は中期防衛力整備基本計画に入ってきます。

元谷 去年から始まったのですか。

錦戸 大綱の決定を受けて、新しい中期は今年度から五年計画で始まっているのです。次期中期、次期次期中期の十五年間で、今の情勢を受けて自衛隊のシフトを変えつつあるのです。例えば、十八万人の陸上自衛隊の定数を十六万人にするとかがあります。

元谷 今、自衛隊は二十四万人でしたでしょ

うか。

錦戸 陸海空を入れればそのくらいになりますが、陸上の場合は十八万、そして十三個師団二個混成団だったのですが、それを九個師団六個旅団の十六万人体制とします。

そしてシフト的には北方重視から少しずつ下げて行く、その青写真が示されて、今動き始めたところですよ。あと十五年くらいかけて、こういう格好でやるという政策です。

元谷 国際状況の変化の早さと、体制の変換していくスピードがちょっとマッチングしなくて、時間がかかりそうですが……。

錦戸 特に我々は人の組織ですから、急に定員が減ったからといって人員をバサッと減らすわけにはいきません。「一日のため、百年兵を養う」わけですから、そういう点でも時間がかかるし、壊すのも時間がかかる。やはりある程度の中長期的視野から見ますと、それは上級司令部もしくは政策的なことでしょうが、変わりつつある第一歩です。我々の部隊はまだ変わっていませんが、いずれ変わっていくでしょう。

元谷 そういう意味では変わりつつあるということですね。いわゆる冷戦構造が崩壊して、「平和の配当」というようなことで各国とも防衛費用を減らそうというように、日本でも大きな意味ではそれを受けて陸上自衛隊も減員計画でやっているわけですね。

錦戸 東西冷戦が終わって、大きな世界規模の戦争が起きる可能性はなくなったと思います。しかし、その中で今まで枠内で抑えつけられてきた民族とか宗教、領土争いなどという問題が出てきているのです。冷戦中にはだいたい一年に2.1件ぐらいの割で小規模紛争が発生していたのですが、冷戦後は年に3.8件と約二倍に紛争が増えてきていますし、今後も続発する可能性は高いと思います。

ボスニア、ヘルツェゴビナとかの民族と宗教の争い、ロシア国内ではチェチェンの独立紛争などがそれで、基本的には大きくないのですがぼっぼっぼと出て、すごい現状だと思います。

元谷 そういう中にあって、日本を取り巻く例えば北朝鮮の問題や、また中国にしてもこの先どのようなソフトランディングを図っていくことができるか、いろいろな問題を含んでいく中で、自衛隊が減員計画をされるわけです。それについての不安といったものはおありではないですか。

錦戸 我々としては、減員計画は別として、国民の期待が最近ますます高まっている感じがしています。例えばPKOでは皆頑張って任務を遂行しました。国内における災害派遣で、阪神・淡路大震災にしても雲仙普賢岳の火山噴火にしても、北海道の古平トンネル崩落事故にしても、皆それなりの任務を達成しました。地下鉄サリンのときも同様です。

元谷 確かに、自衛隊への評価は上がってきていますね。

錦戸 そうです。しかしながら若干のリストラはあります。でも、そういう厳しい情勢の中でどう対応していくかということが、我々の今からの、厳しいけれどやらなければならない任務だろうと思うのです。

元谷 やはり効率のいい防衛力が肝心ですね。

自衛隊は何かを生産している！ というわけではないけれど……

錦戸 私が自衛隊に入ったのは六〇年安保の翌年です。次に七〇年安保もあり、その時代から見るとずいぶん世論も変わってきました。

最近、特に自衛隊に対する期待をひしひしと感じます。最後のよりどころは自衛隊だというような国民の期待も感じますし、そういう意味では非常に変わってきたと思います。

元谷 いろいろなバランスもあって思いどおりにはいきませんが、大きな国際情勢の流れは軍縮にあって、それに沿ってやっていくということですね。

錦戸 政策的なことは上級司令部にやっていただいて、我々の任務は普段いかに訓練をし

て何かあったときに対応できるだけの実力を備えるか、これに尽きると思います。

自衛隊は何も生産はしていないのです。ニワトリを飼っているわけでもありませんし、田んぼを耕やしているわけでもありません。何かというと、訓練をしていざというときに使える、国民の期待に応えられるだけの実力を養うこと、これが仕事の全てであって、良心であろうと思うのです。それが我々の存在価値だと思っています。

元谷 いざというときのためにこそ、日頃があるということですね。

錦戸 それ自身も国防という観点からで、我々が一生懸命に訓練をして強いと思われれば抑止力になるのです。それが一隊だけではだめです。全部の隊がそのようになってこそ抑止力になるのです。

元谷 戦争をして勝つというよりも、戦わずして勝つことが大事ですね。戦わずして勝つには、戦ったらしっぺ返しが恐いぞと思わせる、これが抑止効果です。それを高めるためには、やはり精鋭であるべきなのです。少数であればあるほど少数精鋭で、なおかつ非常時にはこれだけの陣構えができるという、ある意味での威嚇ですが、「侵略は高くつくぞ」ということを周辺諸国に理解させることですね。

錦戸 我々第一線の部隊がお役に立つといったら、やはり「使える部隊がいますよ」という体制を維持することだと思います。

元谷 そうですね。非常時にはそれだけのことをやり抜く部隊、隊員でなければいけないでしょう。

一番大事なのは、精神論だけでは戦えないということだと思います。人間は自分に自信を持って臨まないと、精神力だけに依拠しないで自分の装備にも自信と誇りを持って、万全の装備で万全の力が発揮できるのだと思います。我慢して精神力を蓄えていけば何かできるというのは、日本の旧軍の考え方でした。

錦戸 今はそれはないと思います。やはり、それなりに任務を付与されるときには、それを

遂行できるだけの装備をしていると思います。

例えば災害派遣にしても、阪神・淡路大震災の経験から、救急救命施設の「人命救助システム」というものも装備されました。救助するための設備はもちろん、若干の治療までできる設備を一式セットにしたもので、これを全国に四十二個用意しました。

つまり、生き埋めになった人を探すことから救出に必要なものまで全部一式揃ったものです。

元谷 それは我々にとっては大変嬉しく、また安心できることです。ただ、それが使われないことが一番いいことなのですが……。

装備のハイテク化と、 女性隊員がこれからの課題

元谷 いま救急設備の話が出ましたが、装備のハイテク化について言いますと、今すぐく世の中のハイテク化が進んでいますよね。そうした中であって、自衛隊のハイテク化がこれからの課題だと思うのです。例えば、こんな小さな携帯電話を持ってビジネスマンが走っているときに、自衛隊は重い無線機を背中に担いでいるわけです。そんなことではいけないように思うのですが……。

錦戸 確かに、我々は今も無線機を担いでいますが、それは携帯電話と違って、無線機というのは自分たちだけで完結できる通信システムだという意味あいがあるからです。

元谷 でも、デジタルで、もちろん民間の携帯電話網ではなくて、例えば自衛隊が一つの衛星を上げたら、それを通じて偵察もできるしGPSにも対応できるし自衛隊の携帯電話にも対応できるわけです。一人一人の歩兵が持てるもの、要するに重量が一番問題なのです。弾をだんだん軽いもの、高速なものにしてたくさん携帯できるようにするのが近代の軍隊の考えです。ですから、銃も弾もたくさん持っても軽くして、無線機も小さくすると……。

錦戸 それは軽いほどいいですよ。演習を今

朝までやっていたのですが、三十キロ以上の装具（銃や無線機等）を担いで、その上で三十キロ、四十キロという距離を歩けと言っていますから……。自衛隊の通信衛星を上げられたら、ほんとにいいと思います。

元谷 それからもうひとつ、これからの自衛隊に必要なことに、女性の登用問題があると思います。アメリカなど見てみると、陸海空軍の一割くらいは女性です。よく欧米の軍隊の観閲式などを見に行きますが、女性の部隊が結構目立ちますから……。

日本でも女性の登用が進むに従って、女性の体力でも十分装備できる、軽量で戦力が減少しない装備に切り替えていくことが必要だと思います。それについても予算を伴うことですから、考えてはいてもなかなか実現できない悩みはあるのだと思いますが……。

錦戸 おっしゃるとおりです。非常に大事なことなのですが、最終的には社長が言われたように、予算をどう優先順位をつけて配分していくかという話になると思います。本当にそういう発想自体持っていただくことは非常にありがたい、素晴らしいことだと思います。

大きな軍縮の流れもあるけれども、女性と男性との雇用機会の均等化がありますね。女性なるべく取り込む、これも大きな流れです。何でも急には行きませんが、逐次やっていかなければと思います。

外国がやっているから日本も全部一緒というのは、国民性もあれば育ち方の違いもありますので、一概には言えないとは思いますが……。体力もアメリカの女性の方がありそうですし……（笑）。

元谷 最近は、日本も強い女性が多いですから（笑）……。

錦戸 体格はそうですね。近ごろの若い女性は、我々より大きいですからね（笑）。

通信部門はたぶん三割近く女性がいたと思います。ただそれぞれの職域があって、女性を数多く取り込めるところと、取り込めないもしくは少数しか取り込めないということはあり

ます。衛生科などはナースがもともといますから、頭数からいけば半分以上は女性ということになります。

元谷 いろいろ申しましたが、日本のためにこれからも頑張ってください。今日は、本当にありがとうございました。



平成 08 年 12 月号

航空自衛隊第六航空団司令兼小松基地司令

空将補 香川清治

アパグループ代表 元谷外志雄

**自衛隊を語ることは、未来を語ること
相手を知ることが基本なのは、ビジネスでも自衛隊でも同じ**

実に多彩な飛行機を、身体で覚えている

元谷 初めまして、今日はお忙しいところありがとうございます。

小松に赴任されてどのくらいになりますか。

香川 半年ちょっとになります。

元谷 前任地はどちらですか。

香川 航空幕僚監部の運用課長をやっていました。

元谷 ということは、司令はもともとパイロットなのですか。

香川 はい。航空自衛隊が新しい飛行機を導入するときには、当然ながらまずテストするのですけれども、F-15 の導入に際しまして、その任務に携わっていました。いくらアメリカで実績のある飛行機だとは言っても、航空自衛隊の運用目的にかなった飛行機であるかどうかというのを、チェックするわけです。

元谷 それは渡米されて向こうでテストされるのですか。

香川 いいえ、アメリカでテストパイロットの学校に入学し、一年ばかり専門に学んだ経験もありますが、テスト自体は日本でやりました。

元谷 そんなふうにテストされた飛行機が導入されるわけですが、現在、航空自衛隊の主力と言いますと、F-15 ということになりますか。

香川 はい、主力はF-15 です。数から言っても、航空自衛隊の中で一番多い機種がF-15 です。

今そろそろ新しい機種の導入時期になっていまして、国産戦闘機でありますF-1 の後継として、F-2 というのが今度入ってくる予定です。

元谷 国産ですか。

香川 いえ、日米の共同開発です。機体自身はF-15 に比べると小さいのですが、「性能、機能的」にはよく考えられたものになっていると思います。

元谷 テストを含めていろいろな機種に乗られたと思いますが、一番最初に乗られたのは、F-86 ということになりますか。

香川 戦闘機について言えば、そうですね。

元谷 その前にも何か？

香川 その前は、飛行教育課程がありますので、昔はT-34 と言っていましたメンター、それからT-1、T-33、F-86 と乗り継いでいます。

元谷 今まで操縦したことのある飛行機を数えますと、結構な数になりますね。

香川 はい、かなりあります。

元谷 ジェット機だけではなくて、プロペラ機にも乗られたことがあるのですか。

香川 いちばん最初のT-34 というのはプロペラ機でしたが、あとはジェット機です。

元谷 最初プロペラ機を練習したうえで、ジェット機へとステップアップするということですか。

香川 全体のシステムはそうです。

元谷 やっぱりスピード感覚に慣れるためには一回プロペラ機をやった方がいいのでしょうね。

やはり上がるよりも降りるのが一番怖いのではないですか。

香川 そうですね。着陸がちゃんとできれば、とりあえず一人前と言えますが、航空自衛隊のパイロットは飛んで何ができるかが大切です。

元谷 接地の瞬間が、一番怖いですね。とくに狭い空港だったりすると……。先日も香港で、山を降りたらすぐに民家があって、ちょっと怖かったですね。

香川 あそこは一番難しいところと聞いています。

元谷 香港へはベトナム空港から向かったのですが、すごい天気悪い日で、上空で一時間ぐらい旋回しながら天候の回復を待っていたのですが、結局ものすごいスコールの中をどうしても降りるということで、さすがに恐怖を味わいました（笑）。

香川 あそこは、滑走路に山とかビルディングが近いでしょう、だから入っていく余裕がないのです。計器進入も難しいのではないかと思います。

元谷 そういう意味では、海上の見晴らしのいい場所に、例えばフロートの滑走路があったらいいかなという気はします。ただ嵐があるとこれまた怖いですけど……。

戦わずして勝つというか、戦いを起こさないための力を！

元谷 自衛隊への認識も変わりつつあると思いますが、防衛の一番の基本は、やはり敵を知ることでしょうね。

戦わずして勝つというか、戦いを起こさないための力を蓄えて、敵の動きを察知して、それで初めて平和が保たれるのであって、ただ戦争したら勝ったというのでは双方に不幸です。そうではなくて、向こうが侵入する意図をくじくと言いますか……。

香川 その気にさせないということですね。

元谷 それが一番大事ですね。向こうの動きを絶えずこちらが掌握し、向こうの能力を絶えず把握しておくということが……。

香川 相手を知ることからスタート

するということは、まったくその通りですし、我々が例えばスクランブル発進などで日夜行っている努力を、向こうがどう評価するかということが、結果としては有意義な状況につながるのだと考えています。

ですから、基地があれば戦争が起こるという発想と、我々の発想とはまったく違うわけです。

元谷 ない方がむしろあなどられて、クウェートが油断してイラクに攻め込まれてしまったというケースも最近でもあるわけですから、攻め入っただけのメリットはありませんよということを知らしめることが大事ですよ。

先頃も尖閣諸島へ台湾や香港の抗議団がレジャーボートでやってきましたが、完全に主権の侵害ですね。

香川 本質的にはそういうことになると思います。いろいろと難しい問題ではあるのですが……。

元谷 もうちょっと日本の世論・マスコミも、それに対してきちっと対応し主張すべきではないかと思う一人なのですが、向こうがから騒ぎしているのに、こちら日本側のマスコミは、何か騒いでいるぞということを書くだけであって、こちらの主権が侵害されたというようなとらえ方の記事というのはほとんどないですね。

そういう意味では、マスコミの論調と、私の意見とではずいぶん違うのですが……。

今の尖閣諸島の問題については、海上保安庁が対応するのですか。

香川 そうですね、海上保安庁が一義的にやっています。

航空自衛隊は、あのエリアについては、外交上の微妙な問題を持っていますから、そのときの状況に応じてということで対応するのを基本としています。

元谷 あその管轄は沖縄の管轄なのですか。

香川 そうです。那覇の航空隊の管轄になります。

元谷 海上保安庁もヘリコプターとかは持

っているのですか。

香川 持っています。

元谷 救難飛行艇とかいわゆるプロペラ機はどうですか。

香川 救難飛行艇は持っていないと思いますが、プロペラ機は持っています。ジェット機も、羽田に二機ばかり確か持っているはずです。

元谷 組織がよくわからないのですが、海上自衛隊と海上保安庁との交流はまったくないのですか。

香川 組織としてはまったく別です。ただ、警察とうちの基地とのかかわり合いみたいな感じでしょうか。

平時においては彼ら海上保安庁がまずは第一義的にやると言うことだと思います。そのあと特殊な状況になったときに、いわゆる非常事態、有事になった場合、海上自衛隊の役割が出てくるわけです。

東西冷戦が終わった今、真の未来へ向けた議論が望まれる。

元谷 東西冷戦が終わったからといって、決して平和になったということではなくて、北朝鮮の潜水艦の問題といい、尖閣諸島の問題といい、難問が次々と起こっていますね。

香川 そうですね。そういう見方をしていましたし、現実になんてなっています。

だから、新しく防衛計画の大綱を作るときに同じような議論がされたわけですけども、それがだんだん当時考えた通りのことが現象として現れてきているように思われます。日本全体が早くそういうことに真剣に気づかないといけないような気が個人的には強いのですが……。

元谷 いわゆる航空団司令の会議や全国会議などは月に一回とか、年に何回かはあるのですか。

香川 年に一回はあります。

元谷 国際情勢の分析とかはその中にあるのですか。

香川 もちろんあります。いわゆる中央の国際情勢分析の専門家から、一応ブリーフィング

を受けたりします。

マスコミ報道などから、自分なりの分析はやりやすけれども、実際の構造はどうかという、ドキュメントにかかわるもののブリーフィングというのは、やはり専門の人から聞かないと……。

元谷 航空自衛隊に使う装備とかは、こういうものが必要だとか、こういうものを装備したらどうでしょうかという、そういう国際情勢などに照らしながら、今後の航空自衛隊としてのあり方についての議論は、おやりになる機会というのはあるのですか。

香川 基本的には、私がここに来る前にいました航空幕僚監部というところで、日本国政府の大きな考え方をベースにしながら、我々制服組の中でプロが考えなければならないことを考えます。

ただ、そのベースになる机の上だけではなく気がつかない部分については、我々現場がいざというときのことを前提に訓練をやって、その延長線上で将来にはこういうものが必要であるという考え方なり情報を上に提供するという役割は、当然現場は持っていなければいけないし、我々はそのつもりでやってはおります。

元谷 日本の軍事費用というのは、諸外国に比べると決して少なくないと思います。でも私から見ると、装備は非常に脆弱な感じがします。それなりの軍事費を使っていると言われてるわりには、装備がかたよっているというか、国土防衛という観点からいうと適切な装備になっていないのではないかと思います。

装備がアメリカの全体の戦略の一翼になるような考え方というのは、東西冷戦下においては非常に大切で必要なことだったけれども、それが終わって日米安全保障条約というのも未来永劫に続くかどうかともわからない時代において、一面だけの役割を担うというのではなくて、トータルな国土防衛という概念に立つ装備に切り換えていくという時代に入ってきたのではないですか。

香川 要は日米安保の問題になると思います。例えば弾道ミサイルに対する対処も、日本独自でそれをすべて負うということになると、相当の技術力と、それを実現するためのお金と、それを定着させるための土壌というものが日本自身にないと、理想像を描いても実現性においての問題が今まではあったし、それを補完するのが、日米安保だったと思います。

それが、東西冷戦が終わって、日米安保というものの質が、今までと同じでいけるのかどうかということの見極めが今非常に議論されているところかと思います。

元谷 私の意見としては、日米安保は堅持すべきだと思います。しかし向こうが必要でなくなったと思ったときに、じゃあやめると言われたときのことも想定に入れておかないと、未来永劫に続くものであって当たり前のものだというところでのみ考えていると、怖いことがあるかもしれません。

一番必要だと思っているときには向こうから切られると。向こうにとって必要なときはいつでも続くけれども、向こうにとって必要でなくなれば、それが打ち切られるということも含めて考えていかないといいませんし、日本の場合は武器輸出三原則があって、大量生産ができませんから、すべて国産でやるということになるとものすごい開発費用がかかりますから…。

非常に制約が多いわけですがけれども、その中でも地形とか地域にあった装備に切り換えていくという努力をと考えますと、私はハリヤーがお勧めなのですから…。

香川 ハリヤーは、昔は議論がありましたけれども、能力的に相当燃料を使うということで見送られたものだと思います。つまり搭載武器や航続距離が日本の防空に不十分と判断されたということです。

でも今の段階では航空自衛隊の運用思想にあう、垂直上昇できる飛行機というのは、受け入れ可能性がだいぶ出てきたのではないかなという気はします。

元谷 一朝一夕というわけには行きませんが、すぐに切り換えるというのは難しいでしょうけれど、ジェット機ひとつについても、ちゃんと議論しなければいけないのだという、意識の転換を大切にしなければいけないですね。

香川 そういうご心配をいただくということは、我々にとって非常にありがたいことです。まっすぐに我々を見て欲しい、と思います。

変革する勇気を、持ち続けていたい

元谷 最後に若い人ということで、**香川**さんの思いを一言お願いできますでしょうか。

香川 若い方ということで適当かどうかわかりませんが、私は基地の隊員には、「変革する勇気を持ち続けないと、本来やらなければいけないことが維持できなくなる」ということをよく言っています。

それから私の好きな言葉で「真の保守は、絶えざる革新によってのみ得られる」というのもまたよく使っていますね。これは私自身も人から聞いた言葉ですが、まさに守りたいことを本当に守ってやるのだったら、その守る方法論の世界はどんどん状況に応じて変化するものだと思うのです。

人間がやることですから同じことを繰り返したのでは、何が本当のことなのかわからなくなってくると思います。ですから、同じ労力と時間と金ですむことであれば、去年とやり方を必ず変えるということです。変えた結果やっぱりもとがいいというのだったら、そこでもとの良さを認めて戻ればいいわけです。何もやらないのではなく、その変わり身の勇気を忘れないようにして欲しい、と強く言いたいですね。もちろん私自身も、そのつもりでやっているつもりです。

元谷 昨日の最善は今日の最善ではないということですね。

時の流れ、時代の変化に敏感に反応し、それに的確に対応できる変革の意志を持たなければ、ということでしょう。

今日この一瞬はこの一瞬でしかない。にもかかわらず同じことをしていれば、これは決して良いこととは言えないということです。

香川 発展性のある考え方や、いわゆる反省・教訓が生かされないというのは悲しいことだと思います。

元谷 世の中は相対的に動いていますから、一つだけが唯一絶対の考えでいたらおかしいですね。時代をふまえて絶えず進化発展をしていかなければいけないのは、我々ビジネスの世界でも同じです。

今日は、本当にありがとうございました。



平成 10 年 08 月号

第 14 普通科連隊長兼金沢駐屯地司令

一等陸佐 酒井 健

アパグループ代表 元谷外志雄

自衛隊の存在意義

**軍隊時代にまで遡れば百年歴史がある、
金沢駐屯地**

**他の国の軍隊と比べても、
自衛隊員の質は極めて高い**

元谷 お忙しいところ時間をとって頂きありがとうございます。こちらへ伺いするという事で、ファッションも少しばかりこだわってみました（笑）。私自身、ある意味の自衛隊ファンだと自認しておりますし……。

酒井 ありがとうございます。なかなかそういう方は数少ないのですが……。代表のような自衛隊の理解者を、どうやって増やしていこうか、というのが今悩みの種というところです。

元谷 やはり、日本ほど国防に無関心な国は、他にはないのではないですかね。

酒井 そうですね。基本的に、自衛隊を自分の目で見たという方が、案外少ないですね。

元谷 そういう意味では金沢駐屯地はまだ

開かれたというか、市民との触れ合いでいろいろな催しをやられていますからね。

酒井 そうですね。昨年度はお花見、盆踊り、創立記念日と、それに駐屯地の創立百周年にちなんだイベントを開催させて頂き、市民との触れ合いの場を設定しました。例年、年四回ぐらいはそういったイベントを企画してきています。

元谷 ええ、私も何度か参加させて頂きました。いまの時代、東西冷戦が終わって、世界規模での戦争の恐怖が無くなったという意味では平和になったということでしょうけれども……。日本にとっては、東西冷戦のときと比較して、本当に平和な状態かと考えると、難しいところだと思いますが……。むしろ周辺で、いろんな民族とか宗教絡みの紛争というのは、今でも多いですからね。

酒井 そうですね。現実やはり、いろいろな問題を内包しています。私もカンボジアに視察に行きましたが、まさにPKOというのは、各国の軍人の品評会なのですね。この国の軍人の士気はどれくらい高いか。団結心、規律心はどれくらい高いかというようなところを、もう如実に見比べられてしまうのです。

元谷 カンボジアをはじめとした過去数回の国際貢献、それに現在は中部方面隊からゴラン高原に派遣されているようですね。

酒井 はい。そんな中で、ほかの国の軍隊と比べて、自衛隊員の質の高さは本当に超一流だと思います。

元谷 そうですか。それは、私にとっても嬉しいことです。ただ、派遣されるときにいろいろな制約を考えると、気の毒な感じはありますね。機関銃がどうのこうので、銃が一丁とか二丁とか……。

酒井 自民党が二丁と言って、当時の社会党がゼロと言って、結局両者を足して二で割ったというような話を聞いたことがありますね……。

元谷 そうですね。ちょっとおかしいのではないかと……。

酒井 要は議論がなされていないということなのですよね。ただ、そのあたりのことを抜きにしても、私が感心するのは、隊員の質の高さです。この金沢の連隊の隊員を見ていて、その思いを一層強くしました。

元谷 一番肝心なのはやはり士気ですから、その士気の高さがあるということですね。

軍事的な空白地帯をつくらないよう、適切な防衛力を持つこと！

元谷 その、士気の高い自衛隊のことを、おそらく七、八割の人が全然知らないでしょうね。

酒井 八割ぐらいの人は、見たことがない。何をしているのかわからない。たまたま災害派遣のときに目にして「ありがとう」と言うぐらいだったりして……。

それで、災害派遣のために陸上自衛隊は必要だという議論になったりすることもあります。そうすると「ちょっと待ってくださいね」と言わざるを得ません。

元谷 やはり抑止力という観点から語らなければということですね。

酒井 確かに、我々が直接そういう本来の任務に就くことは、我々の組織ができてから、なかったわけなのです。ただ、そういう任務がないことを一番望んでいるのも我々だし、なかったというのは、我々が存在したからというか、存在することも一つの原因として、これまで何もなかったのだと考えています。

これらのことを最初に理解していただいたうえで、我々の組織が存在することが必要なのだ、という理論構成に本来なるべきですね。それで、普段その力を活用すれば、災害派遣だとか国際貢献にも使えるよと……。

そういうふうな理解というのを、今後どうやって広めていくかというのが、私が今、一番考えていることなのですけれどね。

元谷 やはりバランス・オブ・パワーというか、力の均衡が平和をもたらすという考え方を持っていらっしゃる人は少ないですからね。そ

ういった力の均衡によって、むしろ戦わずして勝つというか、結局、戦う意欲を喪失させることにつながるわけですから……。

酒井 そうですね。結局「この国を攻めたら甚大な被害を受けるよ」と。そう簡単にやすやすと取れないのだと。「それだけの代償を払ってでも、攻めていきますか」ということを考えさせるために、我々は存在するのです。

平成七年の十一月に閣議決定された新しい防衛大綱にも、明確に書いています。我が国が軍事的な空白にならないように、適切な防衛力を持ちましょうと。それによって、相手にまず最初にいったん考えさせることができる。そして我々の教育訓練の姿を見て、「これを攻めたら、とんでもないことになるな」と。「とてもとてもまともな姿では」というのを理解させることによって、抑止力というのは働いてくるわけですからね。

元谷 そういう意味で、やはり日本の新聞などですと、何か災害が起こったときにだけ自衛隊のことを取り上げて……。そのときだけは書くのだけれども、日ごろの存在そのものについて、報道が少ないという気がしますね。

酒井 そうですね。幸いにして、この金沢駐屯地十四普通科連隊というのは、記者クラブというのを持っていて、新聞社が10社にテレビが4社、ラジオが1社入っていただいています。月一回、定例記者会見というのをやっていただいて、そういう意味で、機会あるごとによく書いてくれているという気はします。

軍隊時代にまで遡れば、百年の歴史と言いますか、百一年目に入っているのですけれども……。

元谷 歴史ある部隊ですね。

酒井 はい、隊と市民の関係というのが、この金沢駐屯地というのは非常にうまくいっています。

元谷 いいですね。

酒井 それだけは、本当に来たときもびっくりしましたし、この関係をますます伸ばしていかなければいけないと思います。

自衛隊というのは、社会的な教育機関としても機能している

酒井 ところで、近ごろ何か世の中おかしくなっていましたね。日銀とか大蔵省の、いわゆるエリートと言われる人が悪いことをして捕まる時代だし……。

元谷 今までそれがあたりまえと思って皆でやっていたことが、いろいろ今になって過去を批判されるから、大変なのでしょうけれども……。

酒井 それから中学生とか小学生がナイフを持って、人を刺してみたりとか……。

入隊式のときにも皆の前でちょっと話をしたのですが、自衛隊というのは「社会教育機関」でもあると思います。

高校を卒業した隊員をお預かりして、教育訓練させてもらって、そしてその中の一部の人は、もちろん自衛隊の中で育っていくのですが、半分以上の人が世の中に出ていくのです。この自衛隊での経験は、ものすごい教育になるのだろうなと思っています。

元谷 民間企業の新入社員などを短期間受け入れて、自衛隊を体験させるということもありますね。

酒井 はい、隊内生活体験というのを年間を通じてやっています。

元谷 それは何日間ぐらいの訓練になるのですか。

酒井 いろんなのがありますが、大体平均すると、二泊三日コースが多いですね。

参加していただいた企業の方に、非常に喜んでもらっています。

元谷 例えば我が社でも応募すれば……。

酒井 応募というか、うちの広報室に「ちょっと行きたいのだけど」と言っていれば……。体験メニューをご紹介します。やさしいコースからハードなコースまでいろいろありますので……（笑）。

三月から五月までは、特に新入社員を対象に

したもので、今年は 250～300 人が参加しています。

これまで高校・大学時代、わりとルーズな生活をしていて、これから会社に入るので、ものすごく心のけじめみたいなものができるようですね、確かに。

元谷 本人の自覚ができるのはもちろん企業にとってメリットですし、体験することによって、自衛隊への理解も深まりますね。

酒井 参加した人たちの所見、いわゆる感想文みたいなものには、私もすべて目を通しています。

中には面白いものがありまして、「もうきつくて大変だった。いつ逃げ出そうかと考えていた」と書いておきながら、「次回はもっと厳しくした方がいい」とか（笑）。

元谷 なるほど、自分が体験したことは後輩たちにも、ぜひ体験してもらいたいということですね（笑）。ぜひ当社でも検討してみたいと思います。

酒井 はい、それでは早速、お待ちしております（笑）

「積極自主」という言葉を、噛みしめ行動して欲しい

元谷 はい、前向きに検討します。営業マンなどには、ぜひ体験させたいものだと思います。

ところで、この対談の最後に、いつも若い人への一言、と一言でお願いしているのですが、若者達をいつも身近に見ている視点から、ぜひ一言お願いします。

酒井 そうですね。言いたいことはいろいろありますが（笑）。一つは、もう本当に二十一世紀だということを、意識してほしいと思います。先ほども少し話しましたが、子どももおかしい、大人もおかしいという時代です。これで本当に二十一世紀の日本は大丈夫か、という気がするのです。

だから今年の新入隊員の入隊式にも言ったのですが、「二十一世紀を担うことができる立

派な社会人、それからたくましい自衛官、これを目指せ」と若い人には言っているのです。

では具体的にはどうすればいいのか、と質問が返ってきそうですが、とにかく一つ何か簡単なものでいいから、目標を持ちなさいと答えたいですね。

元谷 最近、目標を持たないで生きている人は多いですからね。

酒井 はい、そうですね。フリーターなどという職業は、最たるものですよね。

二十一世紀にふさわしい目標の一つ持って、そのために努力しなさい、そういうことを私は常々若い人に言っています。

元谷 やはり私がよく言うのですけれども、成功の三要素ということで話すのです。

まず、オプティミスティックに、物事を楽天的に明るくとらえなさいということです。二つ目は、人のせいにしたり、物のせいにしてはいけませんよと……。そしてもう一つは、計画を立てて、いわゆる目標を持って、いつまでにどうするのだという目標を持って生きなさいと……。

この三つをやれば、あなたも成功者になれますよと。これをいつも私は言うのです。まさにその中で言う「目標を持って生きる」ということは大事ですね。そういう意味では、体験入隊などすると、また考え方は変わりますね。

酒井 そうですね。連隊のいたるところに「積極自主」という言葉が貼ってあるのに気づかれたでしょうか。「自主的に！積極的に！」という言葉です。

着任当初の記者会見でちょっと話したのですが、自衛隊という組織は本来、命令に基づいて行動するのです。命令に基づいて行動する習慣がついてしまうと、言われなければやらない人間ばかりになってしまうのです。ですから、逆に「積極自主」が大切だと、私が提唱したことなのです。

そのときの記者からの質問で、「では命令がないことをやらせるのか」と突っ込まれたことがあるのですけれども、そういう意味ではない

のですよね。

我々が与えられた仕事をするときに、一つでも「やれ」と言われたことをやる方法は、こういう一つの方法のほかに、いろんな方法があるでしょう。それをまず自分自身の頭の中で考えて、そしてそれを自らやってみるという姿勢というのを、持たなければいけないよということなんだ、という話をしたのです。

いろいろ付き合ってみると、この北陸の人というのはおとなしい、燃えにくい、という感じがあります。「積極自主」というのは的を得たフレーズだと自負しています。

元谷 私も感じています。どうも濡れた新聞紙みたいでなかなか火がつかない……。でも濡れ新聞紙が乾いてくると、今度はバツと燃えるわけですが……。

酒井 あとは持続力ですね。もともと忍耐強さはあるわけですから、持続力も十分にあるはずです。

元谷 本来軍隊というのは指揮官が亡くなったときに、次の人がバツとその指揮を執り、その人が亡くなったら、その次の人が指揮を執るというシステムですよ。ですから命令に従うけれども、次の次という「自分のときにはどうする」ということを考えておかないと、スムーズにはいきませんね。

酒井 はい、その通りです。

元谷 一人一人がよく考えてやる。例えば命令に従っていながらも、自らのことを想定しながら、考えながら次の行動を起こすということが大切なのです。

酒井 そうですね。だから今、中隊長を集めていつも言ってるのは、「まだ俺にストップをかけられた中隊長は、ほとんどいないじゃないか」という話をするのです。「たまには、私にストップをかけられるぐらい積極的にやれ」という話です。

元谷 「積極自主」というのは、私の仕事のやり方、そのものかも知れません（笑）。

今日は、本当にありがとうございました。



平成 11 年 04 月号

第六航空団司令兼小松基地司令

空将補 田母神俊雄

A P A グループ代表 元谷外志雄

独立自衛の時代

グローバルな視点で

「自衛隊のある日本」を考えたい

新しい世紀の平和のためにも、

近代史をもっと教えるべきだと思う

元谷 お忙しいところ、時間をとって頂きありがとうございます。自衛隊に関しては私自身も相当な思い入れがありますので（笑）、さっそく対談を進めさせて頂きます。まず身近な事柄からの質問です。小松基地としては、スクランブル体制も重要な任務の一つだと思いますが、実際、スクランブルの回数はどの程度ですか。

田母神 スクランブルの回数については、十年ぐらい前と比べると、かなり減っています。

元谷 東西冷戦の時代には、定期航路みたいにして、日本の領空ラインすれすれをずっと、ウラジオストックの方から…。

田母神 はい、そのようなことが以前はしょっちゅうありました。

でも今はロシアの航空活動そのものが若干低下しているということがありまして、我が日本の領空に接近することはかなり減ってきていますので、スクランブルそのものはかなり減っています。

元谷 ロシアに対しての緊張関係はこのところ低下しているということですね。先日、韓国の沖合で北朝鮮の潜水艇を韓国軍が攻撃するとか、そのようなこともありましたね。そのようなことについて、日本の自衛隊はかなり掌握されていたようですね。いろいろ機密的なこともあるのでしょうか。 テポドンのときも

小出しに情報を出されていたようですか、本当はかなり掌握されていたと私は思っています…。

田母神 あまり詳しいことは言いませんが、日本の情報力も逐次向上しています。日本周辺や、日本海に面した大陸部分などの情報については、現在、どういう状態にあるかということまで、どこにどういう船、どういう飛行機がいて、どういう訓練をやっている、今日はどこからどこへ移動したなど、そういうことについては、ほぼ掌握しているのではないかと思います

元谷 こちらですと、能登の方にレーダー基地サイトがありますね。

田母神 はい。あれは航空活動を監視しています。

元谷 それから、いわゆるイーゼス艦というものが、今回の場合などは事前に人工衛星で発射の予測をつけて、監視していたような…。

田母神 あれは、ほぼ一か月前から、撃つのではないかと…。

元谷 発射体制が刻々と…。

田母神 はい。そのようなことで、我が方の、米軍も含めて、船、飛行機が一応の監視体制をとっていました。

元谷 第一報の新聞を読んだとき、ちょっとおかしいなと思いました。実際はもう少し掌握されていることだろうとは思いました。いろいろな政治的な思惑もあって、アメリカなどいろいろな関係があって、人工衛星説というものを、まだ捨てきっていないといえますか…。もちろん、一種の偽装として、最終段ロケットの部分から何か発射して、人工衛星実験もどきのことはあったろうとは思いますが、もともと、ある意味においては、日本に対する威嚇ではないか、私はそうとらえるべきではないかと思います。経済的に息詰まった北朝鮮が軍事的に経済援助を引き出すために…。

田母神 日本の場合は、戦後の教育の問題もあると思いますが、第二次大戦に負けて、東京裁判以降、まず日本が悪い、もう一つは、国家、国が悪い、国民は常に善良だ、日本の国以外は、

みんな、いい人ばかりで、いい国ばかりだという教え方をずっとしてきたのではないかと思います。私は、それが行き過ぎていると思っています。今、世界を見てみるとちょっと言葉が悪いのですが悪ガキみたいな国家がたくさんあるのではないのでしょうか。これに対し私はアメリカや日本は大人の国であると考えています。現在のところ、大人の腕力(すなわち軍事力)が悪ガキの腕力より強いので国際社会の秩序が維持されていると思います。これが抑止ということなのですが、もし米国を中心とする先進諸国の軍事力がなければ国際社会は無法地帯になってしまいます。

元谷 そうですね。

田母神 実際、国というのは国民の生活を守るためのものです。日本がよその国に比べてそんなにひどかったかといいますと、私はそうではないと思います。

元谷 そうですね。

田母神 今の日米関係は、日本の安全と繁栄の基本だと思いますが、アメリカそのものも、第二次大戦までのアメリカは今のようアメリカではなかったと思います。

元谷 そうですね。

田母神 アメリカ自体が十九世紀の後半から第二次大戦が終わるまで、執ように日本をいじめ続けたというところがあると思います。実際、いわゆる「排日移民法」という法律が米国民議会で作成し、日系人が全ての財産を没収されたのは、わずか 75 年前、1924 年のことなのです。これらの日系人は第一次世界大戦ではアメリカの兵士として戦争にも参加しています。そういう人種差別が公然と行われていたのは大昔のことではなく、20 世紀に入ってからのことなのです。人種差別がタテマエ上許されなくなったのは、1948 年の国連による世界人権宣言以降のことです。日本では、徳川時代や安土桃山時代の歴史はかなり詳しく教えますが、近代史はほとんど教えませんよね。そのあたり教育の問題が大きいと思っています。

マスコミの姿勢も変わりつつある、 衛隊に対する認識！

元谷 教育と、それにマスコミの問題も大きいと私は思っています。井戸端会議のときはまだよかったのですが、ぱっと書いた記事や、ぱっと話したことが、いきなり全国に広がって、マスコミ世論となってしまいます。一人一人の意見や考え方が世論を作り出すのではなくて、マスコミが作り出す世論というものがすごく影響を与えてしまいます。この辺に少し恐いところがあります。

田母神 そうですね。偏った事実だけを報道するから、どうしてもそうなりますね。実際は情報操作しているのと同じことですね。やはり、均等に報道しなければいけません。

元谷 比較的最近では、一部マスコミを除いてはマスコミ論調も、自衛隊に対する認識が、変わりつつあると思います。かつては、自衛隊と言っただけでアレルギーを起こしたり、旧軍隊と混同したりしました。確かに旧軍も悪いところはあったかもしれませんが、しかし、どこの国の軍隊もすべてが正しかったわけではありません。やはり、過去にいろいろな問題を持っているわけです。イギリスが謝罪するとなれば、世界中を謝罪して歩かなくてはいけない、大変な歴史を持っている国ですからね。

田母神 歴史と言え、私はここ小松に来て、やはり前田藩の加賀百万石というだけあって、尚武の気風といいますか、武を尊ぶといいますか、そういう気風が非常に残っているなと感じています。

元谷 陸上自衛隊の方でしたけれども石川・金沢の県民性・市民性は、ほかの基地と比べると非常に自衛隊に対する市民感情がいいのでという話をおっしゃっていました。

田母神 そうですね。そういう意味では、我々がここで勤務して、訓練などをやるうえには、非常に心安らかにやらせていただいています。

元谷 やはり皆で支えようといいますか、自

分たちの国、生命、財産を守ってもらっているという根底認識が育っているといえますか、実態を理解しているといえますか。そのあたり、地域によって認識の差がありますね。

田母神 そうですね。自衛隊も戦後ずっと叩かれてきた歴史があるから、どうしても…。

元谷 私のペンネーム（藤誠志）のエッセイにも書きましたが、北朝鮮のミサイルが日本上空を通過したことは、ある意味で、非常にいい反面教師であり、北朝鮮にとっては日本を脅かしたつもりだったのが、反対に平和ボケの日本の眠りを覚まさすことになったのではないのでしょうか。ペリーが浦賀に来て、日本が急速に変わりましたよね。ああいうことがなければ、もう少し鎖国状態が続いて、いきなり列強の侵略を受けて、中国のように植民地化されたかもしれませんね。そういう意味では、テポドンのミサイルが日本を通過したことは、日本にとって一つの脅威が反面教師として自衛隊の必要性を…。かつて'92年5月号のアップルタウンに偵察衛星の必要性を書いたときは偵察衛星なんて必要ないのではないかとの意見が強かったのに、最近は世論調査やマスコミでも、偵察衛星くらい持たないといけないのではないかなってきていますからね。

田母神 はい、すでに予算化されて、動き出しましたからね。

元谷 ただ、偵察衛星を持っても、それだけでは、有効なものにはなりませんよね。今、TMD構想などいろいろありますが、これも今の科学技術だけでは、有効な迎撃率という点では、まだ不十分ですよ。アメリカですら、まだ完成していません。

田母神 実際、ミサイルでミサイルを完全に撃ち落とすようになるには、まだ五年、十年と時間がかかると思います。

元谷 ある意味で、TMDの研究も必要ですが、それで完全にカバーしようとする膨大な経費がかかってしまいます。日米安保条約はもちろん大事なものとして守っていかなければいけません、やはり今後は平等互惠の安保条

約に改定していかなければいけないでしょう。一方的に、今までの東西冷戦の中にあって自衛隊の求められた役割というのは、アメリカの防波堤として…。

田母神 陸上自衛隊はもともと警察の予備隊ですが、海上自衛隊はアメリカの海上作戦をやる前提の中で、対潜水艦戦をやるために立ち上がっているわけです。航空自衛隊は、当初、アメリカに占領されていた極東の、日本にある米軍基地を守る防空部隊としてできあがりました。ですから、世界の空軍は圧倒的に攻撃が主体です。しかし、日本の場合は防空ですから、守ることが主体となっています。

小松基地の役割が、 今後ますます重要になる

田母神 やはり、このあたりのことを考えますと、国家が悪い、日本の国が悪いという戦後の教育が行き過ぎていると思います。

元谷 そうですね。自衛隊が本当の意味で、きちんとした役割を演じていけるように支えていくのは、やはり、国民全体の世論です。世論がきちんとした考えで、今の現実、世界観、歴史観を持って、正しく支えていかなければいけません。

田母神 私は隊員にもよく言うのですが、自分たちのやっていることが正しいことである、正義である、という気持ちがやはり使命感だと思います。それが、おまえたちがいるから戦争になるという風潮ですと、隊員が使命感を持つのはなかなか難しいと思います。そうではなく、アメリカを中心とする今の旧西側の軍事力が世界の絶対権力となって、悪いことをすればたくぞというにらみをきかせているから、国際社会が安定しているのだと…。

元谷 ベトナム戦争はアメリカがベトナムに負けたわけではありません。北ベトナムが南ベトナムに正規軍を派遣しながらも、民族解放戦線の偽装をして南進してきたことに対して、世界のマスコミがうがったとらえ方で報道し、そ

れが世界の反戦運動になり、アメリカ国内の世論に足をひっぱられて…。

田母神 ベトナムというのは、いわゆるゲリラ戦なのです。アメリカは、ベトナムで初めてゲリラ戦を体験したのだと思います。そのときに、隣にいたおばさんが突然アメリカ兵に襲いかかるということがあって、ゲリラ戦とはこんなものなのだということが初めてわかったのだと思います。結局、戦う相手が誰かわからないわけですから…。

元谷 そのことが過大に報道されて、本来なら北ベトナムが南ベトナムを侵略したわけですが、そういうとらえ方ではなく、いかにもアメリカが不正義な戦争をしているということ、戦う兵士自身が使命感が持てなくて、結局、自己崩壊のようなかたちで負けてしまったわけですからね。戦うときにはやはり使命感、日本の国家、国民のために私はこういうことをやっているという錦の御旗をきちんと掲げてやらなければいけないと思います。企業経営においてもそうですが、お金もうけのためにやるのだと言っても、ついてきません。

田母神 人間と動物の一番の境目はそこだと思います。

元谷 そうです。ですから、私はいつも社員に日本の住まい文化に貢献するために頑張らなければいけないと言っています。ものごとには大義名分と言われる「錦の御旗」が必要です。政治というのは、生命、財産を守ることがもとであって、そのためには力の背景がないと守れません。それが軍事力なのです。その軍事力を厳封して、制約の中で、ママっ子のように育ててきたことが、戦後の日本をこういういたらくの国にしてしまったのかなと…。今からは、周辺有事といいますと、日本海を取り巻く環境です。小松基地が担う役割はますます重要になってきますので、そういう意味からも、怠りなく、万全の体制で頑張っていただきたいと思います。私はエールを送る一人です。

田母神 ありがとうございます。

仕事上でも、私生活でも、 目標を持ち、夢を持って欲しい

元谷 私も自衛隊に対しては熱い思いがありますので、少しばかり饒舌になったかも知れませんが、お許しください（笑）。最後にいつも、若い人に一言ということでメッセージをお願いしているのですが…。

田母神 いつも若い人に言っていることは、やはり、目標を持ちなさいということです。私は、人間というのは目標に向かって努力するように作られていると思います。ですから、「今年の目標は何だ」と言ったときに、まず自分の仕事の目標、それから私生活での目標。若い人であれば、例えば三百万円貯金するとか、今年は結婚しようとか、マンションを買おうとか、そういう私生活の目標。仕事で言えば、ここまですることができるだろうとか、F-15の操縦も初級、中級、上級とあるのですが、上級になろうとか、ミサイルの命中率で日本一になろうとか。とにかく仕事と私生活での目標を必ず立てなさい、それに向って努力しなさい、と言っています。

元谷 目標を定めて、一日一日充実した日々を一生涯続けられる人生を送りたいですね。毎日全力でトライすることですね。

田母神 やはり、心が前向きだと、顔つきが違ってきますからね。

元谷 そうですね。確かに顔を見ると大体わかります。ある程度の年になったら、自分の顔に責任を持てという言葉がありますね。

田母神 まさにおっしゃるとおりだと思います。

元谷 特に軍人はそういうものが大事だと思います。

田母神 幸い、自衛隊などでは、練成訓練の目標とか、いろいろな業務、例えば戦技競技会で飛行隊が優勝するとか、仕事上の目標は比較的設計しやすい体制になっています。一方、個人の生活目標も非常に大事なことです。仕事と私生活を合わせて頑張れと、いつも言っていま

す。

元谷 やはり自分の人生ですし、人生は一度しかありませんから、大事にしたいですね。

田母神 カーネギーが『人を動かす』という本を書いています、非常にいい本だと思います。その姉妹編で『道は開ける』という本がありますが、今、代表がおっしゃられたようなことが書いてあります。

元谷 そうですか、同じ事を言っているというのは嬉しいですね。今日はお忙しい中、いろいろありがとうございました。



平成 11 年 12 月号

第 14 普通科連隊長兼金沢駐屯地司令

一等陸佐 渥美晴久

A P A グループ代表 元谷外志雄

一所懸命

日本人は、もっと自衛隊を語るべきだと思う

基本は国民の選挙を通じての、
シビリアン・コントロール！

元谷 今日は、お忙しいところ本当にありがとうございます。

こちらに赴任なさってまだ間もないですね。

渥美 はい、赴任したのは七月九日ですから…。

元谷 その短い間にも、市民と自衛隊とのふれあいイベントがいくつかありましたね。

私も、夏の盆踊りでお会いし、そのあと、観閲式でもお会いさせて頂いたわけですが、こういうふうに駐屯地を開放して、市民とのふれあいの場があるというのは、とてもいいことですよ。

渥美 そう言っていただけると、本当にうれしいです。私はいつも隊員に話しているのですが、我々の任務を遂行する場というのは陸の上なんだと…。

要するに、海の上でもなくて、空の上でもなくて、必ず市民の皆さんが生活を送っているのと同じところ、あるいはその真ただ中で任務を遂行しなければならないということです。皆さんの協力なしに任務遂行ができないのです。

元谷 国民のために、生命・安全・財産と国土を守る、そういう国民と一体となつてのいわゆる軍事力、自衛力ですから、国民から遊離してしまつたら意味がありませんから…。

渥美 そうです。気持ちの上でも遊離してしまつたらいけませんし、本当に皆さんが住んでいるすぐわきで任務を遂行しなければいけないわけです。状況によつたら、だれかの土地をお借りして、あるいは建物をお借りして、任務を遂行することがあるので…。

元谷 自衛隊といえは私は小松出身でありまして、小松には昭和 36 年 2 月に航空自衛隊小松基地ができ、昭和 38 年には小松基地友の会もでき、広く日本海全域のエリアをガードしている小松基地の友の会が金沢には今までなかったのが不思議でしょうがなかったのですが、遅ればせながらこの度頼まれまして私が中心となり「小松基地金沢友の会」を 130 名を超えるメンバーで発会することができました。やはり自衛隊は国民である我々県民・市民にとって、一体感のある軍事力・自衛力というものでないといけないとの思いが、今回の友の会の発足となつたわけです。

渥美 ありがとうございます。

元谷 この会が、もっと自衛隊を語る場になればと、そんなふうにも思っています。

日本の自衛隊もこの際はつきり認知され、国土を守り、国民の生命・安全・財産を守るといふ本来の国防軍としての立場でおやりになるのがいいのでは、というのが私の持論です、もっと自衛隊側からもそのような声が上がってもいいのではないのでしょうか。

渥美 そうですね。ただ、我々としては、現行法制下、現行の枠組みの中でどういうときに、何ができて何ができないのかということだけは、はっきり明確に言わなければいけないとは

思っております。

例えば、不審船などが来たとき、何もしていないものに対して、いきなり我々の刀は抜けません。現行法の枠組みでは、ここまでしかできないということだけは言っていかなければいけません。

だからといって、このままでいいと言うわけではないとも思いますので、そこはもう国民の投票というカタチを通じてのシビリアン・コントロールの中でやるべきものだと思っています。

元谷 法律があれば、その法律を守るのは当然のことです。しかし、その法律がおかしければ、ちゃんと正すということをしていかないと、金科玉条のように、五十年、六十年たっても、同じ時代背景があるわけなどないのですから…。

時代に応じたきちんとした法体系を整備して、それにふさわしい軍事力というものの、日本の国力にふさわしいものを整備していかないといけません。

新しいガイドラインは、 日本にとってまさに新しい一歩！

元谷 防衛問題を語るとき、避けて通れないものに日米安保条約がありますが、これは双務的なものではなくて、「米国に日本を守ってください。しかし、日本のできる範囲は憲法の範囲ですから、我々はこれだけのことしかできません」というもので、変則的というか、偏ったものだとは私は考えています。

戦後の一時期まではそれでよかったのだと思いますが、今後もずっとこのままでいいのか…。いわゆる東西冷戦が終わって 10 年、今はちょっと変えていかなければいけない時代に来ているのではないのでしょうか。

そういう意味で、自衛隊のあり方も、今までよりも変わりつつあるのでしょうか。

渥美 アメリカとのかかわりについては、新しいガイドラインができて、そのガイドラインの

もとに関連法案ができたというのは、日本全体にとっては大きな進歩だと思います。

日米安保条約そのものをどうするのかという話になってくると、例えば、朝鮮半島の情勢が、南北の朝鮮が緊張を持って対立をしているという状態の中で、おそらく日本にとって、日米安保条約というのは、まちがいなく重要な条約であるから、これは国益にかなった条約だと私は思っています。

その中で、自衛隊がどういう役割を果たすかというのは、いろいろこれからも議論されるべきだし、変わっていくべきだとは思っています。

安保条約そのものをどうするのかという話の一つの契機になるのは、朝鮮半島の統一で、北朝鮮は経済的に成り行かなくなり自滅して統一されるというシナリオもあるだろうし、あるいはクーデターなどによる政権の変更があって、そのあとで統一されることもあるだろうし、あるいは、北朝鮮が自らの政策を変更して韓国と連邦国家をつくり同化していくという、そういういくつかのシナリオがあるのでしょうか。いずれにしろ、朝鮮半島というのが統一され一つの国家となったときに、安保条約をどうするのかというのは、大きな問題になると思います。

元谷 今おっしゃられたように、いくつかのシナリオが考えられますが、私は北朝鮮がいずれ自らの金正日体制に対して何らかの変化を起こし、韓国と協調していこうという政権が生まれるという可能性の方にかけています。

韓国も東西ドイツの合併における負担の大きさということも分かっているんで、すぐに一緒になろうとしないで、初めは連邦制というか、二つの国が体制の違いを超えて連合するというかたちでいこうと考えているのではないかと思います。

いずれにしても、最終的に一緒になったときに、日本の隣に強大な朝鮮という南北二つを合わせた軍事力を持つ大国に日本が対面することになります。

今の我々の都合だけからいえば、韓国と北朝

鮮と二つに分かれて対立している、今の分断の状態のときの方が、むしろありがたいと言えるわけで、このところ大変な脅威となっている北朝鮮がテポドンを使って攻撃してきたところで実質的被害なんていうものは、微々たるものです。

例えば、F-15 イーグルが行って、向こうで爆撃をする、その破壊力と比べたら、テポドンがここまで飛んできた弾頭の弾薬量というのはたかが知れているので、おそらく十発や二十発打ち込まれたとしても、精神的動揺とか、防御のしようがないことに対して、不安感がありますけれども、実質的な物的人的被害という点で私は脅威を感じていません。

むしろ、隣国に強大な統一朝鮮という国ができるときに、日本がどうあるべきかというのは、とにかく大変な問題です。

渥美 すごいテーマだと思います。今おっしゃられたテポドンそのものに対する脅威というのは、代表が思われているほど小さくなくて、例えば、核とか化学兵器とかそういうものを積まれると、非常に恐いなという気がありますけれども、そういう話よりは、あそこに統一された朝鮮ができたときに、統一朝鮮がどちらを向くのかというのが非常に大きな課題なのです。

彼らは、大陸に対して備えるのか、あるいは海洋方向に対して備えるのかというのは、大きなテーマです。

元谷 基本的には、歴史的に見ると、やはりまずは大陸に対して備えるのではないかと考えられます……。

朝鮮に統一された安定した政権ができれば、そうあってほしいと個人的には願っています。

もうすぐ始まる 2000 年に、 自衛隊は創立 50 周年を迎える！

元谷 ところで、来年二千年というのは……。

渥美 はい、自衛隊創立五十周年でもあり、この駐屯地創立五十周年でもあります。記念式典的な面でのアイディアなどもぜひ代表にア

ドバイスして頂きたいと思っていますので、よろしく願います。式典的な面ももちろんですが、半世紀というのは、やはりいろいろな側面においても、大きな節目となると思います。

元谷 今年のイベントの一つに、訓練を見せるといったものがありました……。

渥美 あれはある特定の状況にどのように対処するのだという訓練ではなくて、それぞれの個々の対応はこういう訓練を基本としてやっていますよという展示です。

訓練というのは結局、実戦が一番の訓練になるのです。次にいいのが実戦に似た状況を作って、その中で訓練をすること……。今陸上自衛隊は、実戦に似た状況を演習場の中に作って、それで訓練しようという努力をしているのです。

今の北富士演習場はご存じでしょう。北富士演習場のところに富士訓練センターというものを作りました。

その富士訓練センターというものはどういうものかと申しますと、一人一人の隊員に全部レーザー光線のディテクターを付けて、小銃から当たったと、それがただ当たった当たらないだけではなくて、一人一人が全部端局になって、その情報が統裁センターにいつ、だれが、どこで、どのような武器でやられたというものが全部データとなって……。そして、ディスプレイに全部隊の状況が出るのです。

元谷 なるほど、デジタル的な模擬訓練ですよ。もちろん、そういった訓練もどしどしやって頂ければと思います。

その他にということなのですが、例えばアメリカの軍隊とかフランスの軍隊とかに相互に交換派遣をして、毎回五十人なり百人前後の隊員が、半年～一年間、他の国の軍隊に所属すると言うのは如何でしょうか。そうすることで、世界の軍隊を肌で体験することになると思いますが……。

渥美 よその国に行って、もちろん実戦をやるわけにはいきませんが、おっしゃるような訓練という面での参加に関しては、その可能性をいま検討しているようです。

元谷 例えば、日米共同訓練を日本でやるのではなくて、日本の自衛隊が向こうに行ってやれば、もうちょっといいかもしれませんね…。

渥美 そうですね。要するに、訓練のやり方が陸上自衛隊は少しずつ少しずつ変わっているのです。一見、十年一日のように見えるかも知れませんが…(笑)。

平和にはコストがかかるんだ！ その意識を徹底させたい！

元谷 私は事業家として当然のことに、コスト意識が身に付いていると思うのですが、「平和」というものに対して、コストがかかるんだ、そのコストは平等に負担しなければいけないんだと、そこが基本的にひろく一般常識にならないといけないと私は思っています。

渥美 我々も何回も言っているのですけれども、今の装備、今の訓練だと、ここまでですよということをしっかりと皆さんに知っていただいて、「ではどうするのか」ということを国民の皆さんみんなで考えていただいて、本当に実効ある防衛のあり方を作り上げなければいけない…。今は、まさにそういった時期だと思います。

元谷 そうですね。ところでいつも最後をお願いしているのですが、これからの時代を支える若者たちに一言ということでメッセージをぜひ…。

渥美 そうですね、それでは若い人というよりも、私が隊員に対していつも言っていることを紹介させていただきます。

そのポリシーを伝えるために、「一所懸命」という言葉を使っています。一所懸命というのは、一つ生まれる懸命ではなくて、一つ所の懸命ということです。

自衛官というのは転勤が多いわけですが…。そのような転勤者には、自分の人生の通過点だというような思いではなくて、そこにおけるその仕事を一所懸命、全身で貫いて死ぬ思いでや

りなさいと…。

また、地元出身の人で長くここで住んでいる人には、それこそ一所懸命に、自分の郷土を守るのに命懸けでやりなさいということを常に言っています。私自身にしましても、おそらく勤務は、二年長くて三年だと思います。

元谷 ちなみに、前任地はどちらだったのですか。

渥美 前任地は陸幕でした。ですから、私は二年あるいは三年の勤務に、全力を出したいと思っています。そういう意味からも、思いを文章にして伝えるようにしています。それも定期的にカタチにすることで、より浸透するものになりたいと考えています。

例えば、朝礼とか何かでしゃべるというのは、自分の考えていることの大体七割ぐらいしかしゃべれないのです。しゃべったことが相手に伝わっているかどうかというと、七割のうち大体そのまた七割理解してもらえればいいわけですね。

そうすると、七割の七割で、半分しか伝わらない。半分しか伝わらないのであれば、このように紙に書くということは、何回も何回も推しますのです、ほぼ自分の言いたいことの九十五%ぐらいは正確に盛り込めるようになります。それを一人一人に見せると、読ませることによって、大体八割ぐらいはわかります。そうすると、七割ぐらいは理解されていると思っております。

元谷 そうですね。私もペンネーム藤誠志で毎月社会時評エッセイを書いていますのでよくわかります。文章にすることというのは、思考するということと同義語だと私も思っています。それらの思考を来年へ、二千年へとしっかりつなげたいものです。

渥美 はい、とくに来年は五十周年ということで期待も大きいと思いますので、またいろいろとアイデアを教えてください。

元谷 そうですね。意見交換会をまたやりましょう。今日は、本当にありがとうございました。



平成 12 年 05 月号

航空自衛隊第六航空団司令兼小松基地司令

空将補 織田邦男

AP Aグループ代表 元谷外志雄

アイデンティティの喪失を憂う。

グローバルな時代だからこそ、日本人としてのアイデンティティが問われる。

死生観、あるいは人生観、それを持っていないと務まらない

元谷 今日は大変お忙しいところをビッグトークにご登場いただいて光栄です。

この対談でも歴代の基地司令にご登場頂いておりますので、織田司令にもいろいろなことをお教えいただきたいなと思ってまいりました。

織田 こちらこそ光栄です。

私は白いマフラーを放さないのですが……。それは、パイロットへの憧れの原点であった、叔父のパイロット姿が、潜在意識として、無形の教育として、私の中に培われたのだと思うのです。

叔父は、ゼロ戦に乗っていたのですが、最後は戦死しました……。

元谷 なるほど、それが織田司令の原点なのですか……。

司令は、防衛大学を出られてパイロットの道を目指されたのですよね。とても狭い門だとお聞きしていますが……。

織田 そうですね、同期で言えば五百三十名ばかり入学しましたが、在学中に留年したり、自らやめたりして卒業したのは四百八十名。そのうちの約六十名がパイロットを希望しましたが、実際になったのは十八名だけです。

元谷 五百三十名のうちの十八名。すごい確率ですね……。

織田 空へのあこがれ、これは誰もが持っているのですけれども、それだけでは駄目なのです。当然ながら訓練がきついのですが、そのときにいわゆる精神的な基盤として何を持っているかだと思うのです。

死生観、あるいは自分の人生観、あるいは国防に対する理解。そういうのがないと最後にはやはり淘汰されていきます。

元谷 安易な道を選択したくなるのが人間ですから……。強い使命感がなければ、挫折が待っているだけということですね。

その強い意志を継続させた司令は、アメリカへの留学を二回もされていますよね。

織田 アラバマ州のマックスウエル空軍基地というところに空軍大学がありまして、空軍将校の教育のメッカなんです。そこでの約一年間の留学が最初です。そのあとはカリフォルニアのスタンフォード大学での客員研究員です。これは軍とは全然関係のない研究室で、安全保障を勉強させてもらいました。まさに国益です。国益がいかにあるべきかを定義して、今の国際関係をどういうふうに我に有利にしようかというのがアメリカのポリシーですから……。

元谷 それが日本では、国益の主張をすることだけで、もうすでにそれが何かいかにも右よりだとか右翼だとか言われてね。

織田 だから私はそれがなぜかないつも考えるのですが……。究極的なところはアイデンティティの喪失だと思うのです。

この間、石原慎太郎が確か産経新聞に書いていたんですけれども、沖縄のドロップアウトした子どもばかりを集める学校があつて、それを映像で見たと……。先生が「お前たち何をやりたいんだ。将来何をやりたいか書きなさい」と言ったときに書けなくて、あげくのはてにぼろぼろ涙を流したと……。自分のアイデンティティをそこまで喪失しているわけです。

また、島田晴雄という慶応大学の教授が同様のことを書いていまして、ものすごく優秀な偏差値の高い学生が、就職活動に入ったとたんに

思考停止に陥るというんです。

どちらも同じことだと思うのです、ドロップアウトした子と偏差値の高い学生と……。自分のアイデンティティを喪失しているのだと思います。個人の生き方と社会のあり方、国家のあり方、要は公のあり方ですが、その関係が切れてしまっているんですよ。だから、自分が社会でどう生きていくかがわからない。

元谷 そういう教育システムに問題もありますね。学校でも家庭でもそれから社会でも、その辺を一番教えていなくて、それでいきなり甘やかされ育った人が社会に出てくるわけですから……。

オーストリッチファッション！

見ないで済ませられる時代ではない

織田 日本のことを言うのに、オーストリッチファッションという言葉があるのですが……。

オーストリッチというのはダチョウですよ。自分の都合の悪いこと、あるいは自分に降りかかる危険が迫ると、ダチョウというのは穴に首を突っ込んでしまうのです。見ないようにするわけです(笑)。

でも、いまの日本が冷厳な世界環境というのは恐ろしいから見ないというのでは困るわけです。実際に目を見開いて、開示して、それに対してどうするかというのを真剣に議論しなければいけない……。

元谷 熊に会って死んだ振りをしていては食われるらしい……(笑)。熊に対しては、やはり毅然と立ち向かうと熊のほうがたじろぐのだと言います。昔は熊にあったら死んだ振りをしろと言っていたんだけど、間違いらしいですね。

織田 オーストリッチファッションというのは冷戦時代には、それでもなんとか済んできたわけですが、保護されていて、死んだ振りして済ませてきたのがこれまでの日本です。でも、これからは環境が許さないと思います。

元谷 日本が貧しい国ならいいのですが、これだけ豊かになって富を持った国なのですから……。

今の日本はそれだけの価値を持っているにもかかわらず、なんら牙を持っていない国だと、対決することなく言いなりの国だと、今は世界から好き勝手に言われています。これは、相当怖いことですよ。

織田 江沢民がある国へ行ったときのこと、日本のことが議論になったら「あれはいいんだ、二十年経てば滅びるから」と言ったそうです。

私は冗談ではなくて、安全保障を担当する者として、危機感を持っているのです。それは何かという人です、人のものの考え方です。

一人ひとりがしっかりしなければさっき言ったオーストリッチファッションみたいな、あるいは熊が来れば死んだ振りをするというような考え方をやっていると、本当に滅んでしまいます、溶けてなくなってしまう。溶解現象を起こしているところは、すでにいたる所に見えていますから……。

元谷 日本人は生まれたときから日本人だから、別に誰からも日本人と見てもらえるし、安心感がそういうものをなくしている原因でもありますね。自分で自覚して日本人だと思わざるをえない立場に立てば、気持ちは伝わってくるでしょうけれど。幸せすぎるんでしょうね。

織田 それは日本とアメリカの違いでしょうね。アメリカはアメリカ人というアイデンティティをなくしたら何もなくなってしまうすからね。

元谷 そう、移民の国として本当に短い歴史しかありませんから……。

織田 日本人というのはアイデンティティをなくしても、黒い髪と黒い目と同じような顔をしたのが日本列島にいるんですよ。そこが大きな差です。

元谷 今から変わっていかなければいけませんよね。

織田 そうですよ。

この先、日本が生き抜くために、 信長の発想が求められている

元谷 いま大変な時代なのに、日本の政治家は兵器音痴と言いますか、兵器のことを言ったり、軍事のことを言っただけで目くじらを立ててしまいますから……。

織田 アメリカの自国の利益を守る軍事派遣とかに対して、アメリカは悪い国だとかすぐに極端な方向へ意見が行きがちですが、それは当たり前なんですよ。

元谷 アメリカにとって当然なことなら、日本もまた当然の域に達しないといけないのではないかと……。

織田 そうですよ。今は信長の発想を必要としているのではないですか。東西冷戦中はともかく、この先日本が生き抜いて二十一世紀も経済大国としてやっていけるかどうかというのはその辺にかかっていますよね。

パワーポリティックスという現実の中を、日本の政治家とかが、その辺の理解をして国益をきちっと主張できる、またそれをサポートできるマスコミであり、国民でなければいけないと私は思っています。

元谷 政治家だけで突出しても、すぐにマスコミにたたかれて失脚でしょう。だからやはりこの国民にして、このマスコミありと、そういう面もあるかと……。

織田 基本的に私は日本国民が変わらないと直らないと……

元谷 ということは教育から。

織田 教育からですね。いかに育てるか、そこに行き着いてしまうんですよ。

例えば明治維新なんて徳川三百年の寺子屋教育、武士道なんていう蓄積があったからこそ乗り越えてこられたのだと思うのです。

今の時代に、あの明治維新のときのパワーがあるかといったら私はかなりペシミスティックなんです。

元谷 悲観的に考えざるをえないですね。

織田 人の教育というのは本当に早く手を打たないと……。

いま若い人たちに望みたい一言は、 歴史を学び、歴史に学べ！

元谷 教育がテーマになってきましたが……(笑)。

いつも最後に一言ということで、若い人へのメッセージをお願いしているのですが……。

織田 若い人に一言というよりも、これからの日本といった場合に、やはりアイデンティティの時代ということで、人を育てなければならぬというふうに思っているのです。ここに着任して人作りということが私の大きなテーマだと思っています。

ある本を読んだらおもしろいことが書いてあって、三流経営者は金を作る、二流経営者は組織を作る、一流経営者は人を作るというのがありまして、まさに代表も人を作られたら正真正銘の一流経営者だと……。

元谷 その例え話は、私も肝に銘じています。

織田 我々は自衛官ですから、自衛官というものの理想型を探ります。そんな時よく自衛官をタマネギに例えて言うのですが、むいていくと最後に何が残るか……。それは「使命感」だと思うのです。

いざというときに命を投げ出しても公のために、国家のために尽くすというのが自衛官ですよ。その使命感というのはどういうふうに育成したらいいのかというのをいろいろ考えた私の結論は、やはり健全な歴史観なのです。

つまり先人が気概を示した歴史を読み、それに対して先人から学ぶということです。

その結果、まずどういうふうに歴史教育をやったらいいか。歴史教育を全くやっていないわけですよ。

元谷 特に近世、近いところの歴史をやっていませんね。

織田 いかに自分たちの先人が苦勞してこの日本を築きあげてきたか。我々はその恩恵を

被っているのだということがわかれば、自然とその使命感というのは達成されるのではないかと……。

ですから、私から若い人に対してメッセージせよと言われたら、「歴史を学び、その歴史から学べ！」と言いたいですね。

元谷 歴史を学んで、しっかり日本という国に誇りと自信を持たなければいけないですね。

自国に誇りと自信を持つということですから、何かそういう言葉を使うことが右翼的といわれるような雰囲気があるのですが、そのこと自体が間違いなんですよ。

織田 それは諸外国に行って住んだらよくわかりますよ。

アメリカの歴史はトーマスジェファーソンから始まって、自分たちの先人がどうやって苦勞してこの国を作ってきたかという、アメリカ人としてのアイデンティティの教育をしています。

元谷 日本も、悲觀的にばかりなっていられないので、ひとつ頑張らなければいけないんですけれども……。

織田 そうですね。私もこれから人づくりをやっていきます。小松基地の中で、一人でも真にキラリと光る人間を育てます。そして代表にもぜひ、未来の日本を担う人を育ててもらいたいと……。

元谷 はい、私も育てます。お互いに頑張りましょう。今日は本当にありがとうございます。



平成 13 年 07 月号

鬼塚 恒久（航空自衛隊小松基地司令）

元谷 外志雄（A P A グループ代表）

心にゆとりがないと、文化は生まれない

元谷 今日はビッグトークにご登場いただきましてありがとうございます。歴代の司令に

ご登場いただき、**鬼塚**司令で6人目ですし、私自身は「小松基地金沢友の会」の会長として、以前より小松基地とは色々と深いお付き合いをさせていただいています。

鬼塚 はい、先日も友の会の総会にお招きいただき、ありがとうございました。今後ともよろしくお願い致します。

元谷 鬼塚司令の着任は、確か今年の三月でしたね。新任地の感想はいかがですか。

鬼塚 三月二十七日付です。
着任以来、金沢にも何度か行きましたし、石川県全体に言える事だと思いますが、まさにこの地は伝統や文化を感じさせてくれる地ですね。

元谷 はい、加賀百万石の伝統というものが、あちこちに色濃く伝えられていると思います。

鬼塚 私は、「心にゆとりがないと文化は生まれない」と思っております。
もちろん、心のゆとりもそうですが、ある程度懐にもゆとりがないと……(笑)。

元谷 そうですね。昔から国王や貴族、大名、教会など、そういうところでは、お抱えの画家を置いたり、芸術家を置いたりしていました。

鬼塚 それが私は文化だと思います。例えば殿様が中秋の名月のときに能を見たいというとき、能楽師を呼んで、「君は能の勉強だけを一年間ずっとやっていてくれ。僕が見たい中秋の名月のときに見させてくれればいいから」と……。

元谷 年一回のために一年間飯を食わせて、練習させるわけですね。

鬼塚 はい、それが文化になるのだと思います。

ですから、加賀百万石というのは、そういう意味ではすばらしい日本の伝統文化を築いてくれているのだなと……。

元谷 ある意味では加賀藩主としての知恵でもあったのです。

と言いますのは、蓄財といいますか、軍備を蓄えたりせず、文化にたくさんお金を使うことで中央に対して警戒心を抱かせない。と、そういうことも考えに入れての施策だったのです。

鬼塚 そういう意味合いもあるんですね。

社会を安定させる役割を、 密かに担っている自衛隊

元谷 江戸幕府の統治の知恵として、地方の雄藩に経費を使わせるための参勤交代がありますね。

鬼塚 絶えず治安を維持するといいますか、統治をうまく進めていくための、その時代の一つの知恵だったのでしょうか。

元谷 家康や家光などが、徳川家の最初の基礎づくりをすごくうまくやったから、三百年近い間続いたということなのでしょう。

鬼塚 その間、大きな戦乱もありませんでしたし、心にも刺々しいものがなかった江戸時代というのが、最近新たに脚光を浴びたりもしています。

元谷 平和の持続には、日本が島国であることが大きく貢献したとは思います。島国であり、たまたま運が良かったといえますか、それが日本という国の歴史ではないでしょうか。

鬼塚 例えば、蒙古襲来のときも、もし陸続きだったと考えると、歴史はまったく違ったものになったでしょうね……。

元谷 しかし、今までは運がよかったからといって、これからもそれに頼っていると危険ですね。

「備えあれば憂いなし」「一日のために百年兵を養う」といいますか、自衛隊というのは、本当は社会を安定させていく役割を密かに担っていますといえますか……。

鬼塚 はい、専門的にプロフェッショナルとして職務に就かないと成り立たないのは確かです。

「さあ、やりましょう」と急に言われても、すぐに飛行機に乗ってだれでもが飛べるというわけでは、もちろんありません。

私どもはパイロットをここで鍛えています、すごく年数がかかります。

元谷 そうですね。費用もかかりますしね。ただ、技術に加えて、精神といいますか、考え方も磨くことが大切ですね。

鬼塚 そうですね。民間航空のパイロットの養成と航空自衛隊のパイロットの養成では、異なる部分もあると思います。

元谷 小泉政権が生まれて、山崎拓幹事長が憲法改正をしてきちっとすべきではないかと……。今までタブー視されていたことも普通の感覚の国になりつつあるという意味では、近い機会に防衛省とか国防省とか、おそらく庁から省へということになるのではないのでしょうか。

鬼塚 私ども部隊の者にとって、実態はほとんど変わらないと思います。それは国民的な合意がなされて、庁から省へという点では非常に喜ばしいことですが、私ども部隊レベルでやる訓練の中身は全く変わらないと認識しています。

元谷 ただ、今はきちっとした位置づけではないですね。それをどこの国でも普通にされているようなかたちに日本も早くしていく必要があるのではないかと、以前から私は言い続けているのですが……。

努力の積み重ねがあって、 はじめて目標が得られる

鬼塚 私の前任地は防府北基地といいまして、第十二飛行教育団、パイロットの卵を養成するところです。小松基地のパイロットの七〜八割方が航空学生出身者なのですが、その二年間の教育を私が担当していました。

元谷 防衛大学出身のパイロットと、ほかに航空学生というコースがあって、航空学生の方の教育をずっとなさっていたと……。

鬼塚 航空学生の地上教育とプロペラ機でやる飛行教育の両方をやっていました。高校を卒業して入ってくる航空学生は年間二千名から三千名の応募者があるのですが、その中で最終的にここに入学できるのは七十名くらいです。

元谷 三〜四十倍の狭き門ですね。

鬼塚 その二年間の教育の中で、精神的な壁を乗り越える忍耐力、闘争心、ガッツが培われて、そのあと飛行教育に入っていくわけです。最初のプロペラ機で六十時間、次にジェットで百六十時間、トータル二百二十時間の教育を受けたところで初めてウイングマークを付けます。

元谷 二百二十時間というのは何年間ですか。

鬼塚 二年ぐらいですね。

元谷 二年間で二百二十時間飛ぶわけですね。ちなみに司令は何時間ですか。

鬼塚 私は三千三百時間ぐらいです。

元谷 三千三百時間といいますと、かなりベテランになるのではないですか。

鬼塚 確かにベテランの域にはあるのかもしれませんが……(笑)。七十名入った隊員たちが、この二百二十時間の教育をする中で、また減るわけです。大体四人に一人ぐらいの確率で……。

元谷 脱落というよりも不適格性を自覚しての、自主退校ですね。

鬼塚 ええ。空を飛ぶことにおける地上でのいろいろな準備とか、上空で教官との一対一の教育になりますので、教官は叱咤激励のために言っていることが、自分が伸びていけないので苦痛に感じてくるところがあるわけです。

元谷 それはほかとの比較で、一緒に入った同期の者がこれだけの技量になって、自分は適正に欠けているのではないかという焦燥感ということから、向いていないのではないかなと。そのように間引かれていってこそ残った人は本当に適格者なのですから、厳しいけれどもしかたがない現実ですね。

鬼塚 そうです。それは現実的にはしかたがありません。努力があつてはじめて目標が得られるものですので……。

元谷 そういう意味では、多くの中から選抜されて、自分が選ばれて操縦席にいるという誇りや気持ちが、いざというときにも全力を尽く

そうという気持ちにつながっていくんですね。

まず議論できる環境がないと、 始まるものも始まらない

鬼塚 我々は、一人一人が誇りを持って国防の任にあたっていますが、今の国際情勢の中で、日本独自で軍備を増強することはとてもできない話です。これからまた、集団的自衛権の行使うんぬんについても、国会でいろいろ議論されるでしょう。

元谷 憲法の解釈で対応できるのか、やはり改憲しなければできないかという議論になりますね。

鬼塚 その辺は私どもが口をはさむようなことにはならないでしょうが……。

元谷 今度の防衛庁長官の中谷氏は防衛大学出身の最初の大臣でしょう。若いし、なかなか優秀な方ですね。そういう意味では、よく理解されている方がなられてよかったと個人的には思います。小泉さんは思い切った組閣をしましたからね。そういう意味では、今までタブーだったことを、そのままにしていけないなと……。

鬼塚 そうですね。議論すること自体がだめだと言われていましたが、まず、議論をしなければ始まらないですからね。そういった面では非常にいい雰囲気になってきたのではないのかなと……。

元谷 重要なものだよという認識を一般の国民、マスコミも理解しだしてきたということではないでしょうか。

鬼塚 今、防衛交流というものが非常に盛んになってきました。昔は防衛交流で海外に行くといってもアメリカしか行かなかったのですが、最近はいろいろなところへ行っています。今もタイとアメリカのコプラゴールドという演習をやっていますが、それにも自衛官が視察に行っています。

元谷 自衛隊、防衛の世界もまた、グローバ

ル化の波が、押し寄せているということですね……。

何事にも目的を持って、 立ち向かってほしい

元谷 パイロットの卵たちに接して、いつも若い人への思いを抱いてこられたと思います。最後に、今の若い人に何かメッセージをということをお願いできますか……。

鬼塚 そうですね、やはり目的意識を持つことが基本ではないでしょうか。目的意識がしっかりしていると、壁や苦悩があっても乗り越えられるのではないかと思います。

自分自身が今までにパイロットとしていろいろな困難にぶつかったときのことを振り返ってみましても、パイロットになりたいという目的意識があったからこそ、それをクリアするために何をすべきかを、一生懸命に自分のこととして考えることができたのだと思います。

元谷 その目的意識も、人によって高低があるのかも知れませんが……(笑)。司令は、高い目的意識を持って、今日までやってこられたということですね。

防衛大学というエリートの集まりで、その中でもパイロットを目指す人がいっぱいいる中で、いまパイロットとして基地司令にまで昇られたということは、まさに、きちっとした目的意識を持ってやられてきた結果ですね。

鬼塚 目的意識の高低というのは、その人それぞれのことですから、どんな目標でも良いとは思いますが……。この話の延長で、ひとつ自負できることがあるとすれば、日誌をずっとつけ続けていることです。それも毛筆で……。

元谷 毛筆ですか……。もう何年になられるのですか。

鬼塚 平成三年からですから、もう十年くらい続けています。ノートも手作りで、和紙の厚いものを買ってきて、半紙を折り曲げて、タコ糸で縫って……。

元谷 手作りのものには、さすがに味があり

ますね。

鬼塚 見返すと、あのときこんなことがあったなど、そのときに僕はどういう判断をしたのか、というのがそこに記されています。

元谷 なるほど、目的意識の流れがそこにしっかりと刻まれているということですね。今日は、お忙しいところ本当にありがとうございました。